

『一人の笑顔のために』

「人権学習」に取り組んでいます。

「部落差別をはじめあらゆる差別をなくすために」毎年、学校では人権学習に取り組みます。人権学習を通して、いじめや差別のない、みんなが楽しくらせる学校や社会をつかっていける三加和中生に育てて欲しいと願って、取組を進めています。

はだ色のクレヨン

家族や友人の顔を描くことをテーマに図画の授業が始まりました。帰国児童のAさんは、一人ひとりの顔をいろんな色で塗っています。そこへBさんがAさんに「ちょっとはだ色、かして」と。

Aさんは「はだ色って何色？」

と聞き返しました。

するとBさんは

「はだ色っていえば、はだ色でしょ」と答えました。

さて、二人の会話を、あなたはどうか受け止めますか。



あなたのはだは何色？

世界にはいろんな肌の色をした人がいます。日本人の肌の色も、一人ひとりみんな違ってきます。それなのに私たちはクレヨンや絵の具で「はだ色」という一つの色を決めてしまっていることに、なんの疑問ももっていないのでは・・・。

違うことって悪いこと？

肌の色が一人ひとり違うように、物事の価値観や考え方も、それぞれ違っているはずです。しかし、そうした違いを、果たして私たちは認めあうことができているのでしょうか。時には、その違いがいじめや差別の原因になるようなことはないのでしょうか。こうしたわたしたちの意識を変える必要があるのではないのでしょうか。

(岡山県人権推進室「人権ハンドブック The Personal is Political」より)

「熊本県人権こども集会」で、

鹿本高校の生徒が、中学校3年生のときにハンセン病について学習したことを発表してくれました。恵楓園を訪れたとき、その広さに驚き、「広いですね。」と言ったら、「皆さん、そう言われます。でも私たちの一生、この園内の中だけなんです。」と答えられたそうです。この一言からも、ハンセン病に対する様々な偏見や差別の現実について知ることができます。知らないことが差別を生んでいます。その生徒は、「病気について正しく知り、理解することが大事だ。」と訴えてくれました。

わたしたちには、日常生活の中で、知らず知らずのうちに身につけている差別的な意識があります。

しかし、人権に関する学習をしていく中で、自らの差別性に気づきます。したがって、様々な人権問題の解決のためには、地域社会や自分自身の中に差別がこんな形であるという事実気づく学習がなされなければなりません。その方法は、他人の話に耳を傾けることも重要ですが、もっと大切なことは、「一体自分はどうなのか」などをお互いに語り合うこと(相互学習)から、差別に気づき、ひとつひとつ取り除いていく学習活動を根気強く続けていくことが大切だと考えています。